

●最優秀賞

伝え合う力を、互いに高め育てる国語の授業

愛知県豊川市立中部小学校 いながき か よ 稲垣香依

1 主題設定の理由

本学級の児童は、明るく素直で、話好きの子が多く、放課や給食の時間になると次から次へと話しにきてくれる。4月から始めた子どもたちとの交換日記では、「今日、学校から帰る途中でツバメの巣を見つけました。ちょうど親が子どもにえさをあげているところでした。これから毎日ツバメの巣を観察していこうと思っています。」のように、身近な気づきや思いを意欲的に伝えてくれる子がみられた。

その反面、自分の伝えたいことをどう表現して良いのか分からず、朝の1分間スピーチで口ごもってしまう子や、言葉は言えても文章にうまく表現できずに困っている子もみられた。「話すこと」や「書くこと」の苦手な子どもたちに本に触れさせ、おもしろさを感じさせることで、これらの言語活動に関心・意欲を持つことができるだろうと考えた。

そこで読書週間に、朝の「がんばりタイム」で絵本の読み聞かせを行うことにした。子どもたちは真剣なまなざしで絵本に聞き入り、素直な感想を次々に話してきた。放課や給食の時間になると、どの子も教室に置いてある絵本を読みふける姿が見られるようになった。A男はこれまで読書への関心が極めて少なかったのだが、率先して本を読むようになった。そして、その中で自分の気に入った本を見つけると、「先生、この本すごくよかったよ。明日、みんなに読んで聞かせてよ。」と言ってくるなど、自分の感動をみんなに伝え、広

めたいという思いにあふれていた。

子どもたちは、自分が本当に感動したり、真剣に取り組んで作り上げたりしたものであると、それを他の人に伝えたいと思うものである。そこで、子どもたちの本への関心の高さを生かし、自分だけの物語作りをする中で、書くことのおもしろさや表現することの楽しさを味わうことができると考えた。

2 研究構想

(1)研究の目標

物語作りの活動を通して、子どもに「伝え合う力」を身に付けさせることをめざし、研究目標を、次のように設定した。

自分の思いを表現する力を育てる国語の授業のあり方を探る

(2)研究の仮説

子どもたちが夢中になって読む本には、いろいろな世界がある。冒険をする話が好きな子、友情の話が好きな子など好みも様々である。そこで、それぞれの好みや思いを生かして物語を作ることにする。自由な発想で書かせることを心がけることで、子どもたちは最後まで関心・意欲を持って取り組むことができるであろう。そして、物語を作るという活動を通して、自分の思いを表現しながら「書く力」を伸ばすことができるに違いない。また、それらを読み合うことで、「話す力・聞く力」「読む力」を身に付けさせることができるだろうと考え、次の研究仮説を設定した。

子どもたちが意欲的に取り組む空想物語作りを教材として取り上げ、授業の展開を工夫すれば、子どもたちの「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」などの言語能力を高め、伝え合う力を養うことができるであろう。

(3)研究の方法

研究仮説を実証するための具体的方策を次のように考えた。

〔手だて①〕 本に興味を持ち、楽しみながら取り組む場を設定する

子どもたちは心躍る思いを抱くと、自ら誰かに伝えようとするものである。指示され、指導されたものではなく、意欲的・自主的な表現活動の中にこそ、生きてはたらく言語能力が培われると考える。本との出会いを工夫すれば、子どもたちは物語の楽しさ・おもしろさを味わい、意欲的に「わたしの空想物語」を作ることができるであろう。

そこで本実践では、それぞれの読書体験からお気に入りの本を一冊持ち寄り、紹介するところから始める。自分の好きな本が題材であるため、子どもたちは意欲的に楽しみながら取り組むことができると考える。

〔手だて②〕 物語の構成を知り、おもしろさを味わう場を設定する

子どもたちがそれぞれの空想物語を作るためには、物語の構成を学ぶ必要がある。本に興味・関心がある子どもたちだからとただ単に「物語を作りましょう」と促すだけでは、書く力の弱い本学級の子どもたちは途方に暮れてしまい、ますます苦手意識を強めるばかりか、物語作りに対する意欲も失ってしまう。そうならないためにも、共通教材を取り上げ、物語のおもしろさや起承転結などの構成を知る場を設定する必要がある。書き手の立場に立って物語を読み進めることで、構成を理解し、また同時に作者がどんな思いで物語を作

ったのかその主題を慮ることができ、読解力を深めることに繋がるだろう。そこで、これらを学習する上で適切な共通教材を教科書教材「あ・し・あ・と」とし、全員で読んでいくことにする。

「あ・し・あ・と」の有効性

- ・空想物語であるため、どの子にとってもイメージを自由に膨らませやすい。
- ・主人公が、ちょうど4年生の児童に近い年齢であるため、取り組みやすい。
- ・起承転結がはっきりしており、物語の構成を知るのに役立つ。
- ・会話文が多いため、読み方の工夫をしながら、「話す力」を鍛えることができる。
- ・子どもたちの読みを深めるのに有効な挿絵が適度に入っている。
- ・余韻を残した終わり方をしているため、子どもたちは想像力を働かせ続きを考えようとするなど、物語のおもしろさを感じ取ることができる。

〔手だて③〕 一人ひとりの思いを生かした物語作りの場を設定する

「あ・し・あ・と」の学習で得た知識をもとに、一人ひとりがそれぞれの空想物語を作ることにする。作成するにあたり、物語の構成要素の中で起承転結があることのみを条件として設定し、内容はもちろん登場人物や状況設定、ページ数など他のことはすべて作者である子どもに任せることにした。

第1時	プロット・あらすじ作り
第2時	「起」のページ作成
第3時	「承」のページ作成
第4時	「転」のページ作成
第5時	「結」のページ作成
第6時	グループごと読み合い・推敲
第7時	表紙作成
第8時	製本

●資料1／物語作成の手順

細かな決まりや制限をなくし、題材も現実世界にとらわれることのない空想物語にすることで、子どもたちは想像の翼を自由に広げ、いきいきとその子らしい表現活動をしながら、同時に書く力を高めることができるであろう。

〔手だて④〕 自分や友達の作った物語のよさに気づく場を設定する

一人一冊ずつ「わたしの空想物語」が出来上がったところで、読み聞かせ会を行うことにする。自分の思いがいったいつまった物語であるため、子どもたちは意欲的に取り組むに違いない。自分の作品を声に出して読んで

みることで、また違った角度から自分の物語を見つめることができるとともに、声の大小・会話など、読み方の工夫をしながら話す力を養うことができるだろう。そして他の子どもも、作品や読み方を通して、友達のよさを見出すことができると考える。また、それぞれの物語について話し合う場も設けることで、互いのよさを認め合い、伝え合うことの大切さに気づくことができるだろう。以上のような4つの手だてで、実践を進めていきたい。

(4)単元構想

単元については、下の表のように構想した。(全18時間)

時	学習活動	☆支援と◎評価
1	○自分の好きな物語を持ち寄り、紹介し合う ○自分の好きな物語と比較しながら「あ・し・あ・と」を通読し、相違点や類似点についてまとめる	☆単元の終わりに自分で「わたしの空想物語」を作ることを具体物を見せながら知らせ、学習の見通しをもたせる ◎関心・意欲・態度 本の紹介文を進んで書き、「わたしの空想物語」を作ることに関心をもちたか
2	○自分の好きな物語と「あ・し・あ・と」との相違点や類似点を発表する ○全文を通読する ○読みをもとに場面分けをおこなう ○自分が特に気に入ったところ、おもしろいと思ったことをまとめる	☆自分の好きな物語と「あ・し・あ・と」の相違点・類似点から物語の構成要素をつかむことができるようにする ◎知識・理解 物語の構成要素をつかむことができたか
3 ～ 6	○子どもの一次感想を発表しあい、場面ごとに読み取りを行う ①フクイリュウと出会う場面 ・友達ができたという嬉しい気持ち ②フクイリュウのことを家族に話す場面 ・父母の勘違いのおもしろさ ③フクイリュウと過ごす場面 ・人間と恐竜と一緒に遊ぶ楽しさ ④フクイリュウと別れる場面 ・「もういいかい」「一まあだだよ」役割読みをしながら「一」の間について考える ⑤フクイリュウと再会する場面 ・再会できたといううれしさ ・フクイリュウのやさしさ ○「やさしい山」について考える	☆それぞれの感想を発表しあいながら、空想物語のおもしろさを味わうとともに、多様な読みがあることを知り、広げられるようにする ☆ワークシートを活用しながら、時間の経過と「ぼく」の気持ちの移り変わりをつかむことができるようにする ☆問の取り方を考え、工夫して読んだり、行動描写や情景描写に注意したりしながら、登場人物の気持ちや主題に迫る読みができるようにする ◎読む力 登場人物の気持ちや主題について、文に即しながら自分なりに考えることができたか

7 18	○「わたしの空想物語」を作成し、クラス内で発表会を行う ①動物・人間・おもちゃなど、主人公の種類ごとにグループに分かれ、お互いにアドバイスし合いながら自分の物語を作る ・登場人物にこんな会話をさせてみたらどうか ②グループで発表し合って代表を決める ・Kさんの話し方も上手でよかったよ ③クラスで発表会を開き、感想を交流する ○1年生と読み聞かせ会を開く ○活動を振り返り、まとめをする	☆自分のアイデアや資料を生かし、楽しみながら作ることができるよう支援する ☆グループで話し合い、物語を推敲・校正できるようにする ☆発表会では、友達の読み聞かせの仕方や物語のよさを見つけられるようにする 場面緘黙のK男は、自分の物語を見せることで発表に代えることになるだろうが、支援をして、題名だけでも声に出して発表できることを期待している ◎話す・聞く力 自分の考えや思いを絵や文を使って伝え、友達のよさに気づくことができたか
---------	---	--

3 研究実践

(1) 読む絵本から作る絵本へ

読書への関心が少ない子どもたちに本のおもしろさを味わってほしいと思い、読書週間に絵本の読み聞かせを行った。すると、本を読むことがほとんどなかったB男が、「先生、この本ね、僕の一番好きな本なんだ。だから読んでみて。」と一冊の本を私のところへ持ってきた。次の日の朝、私が登校するのを待っていたかのように一番にB男は私のところへやってきて、「先生、あの本、もう読んだ？すごくよかったでしょ。なんか最後は悲しいんだけど、でも大好きな話なんだ。」と目をきらきら輝かせ、次から次へとその本に対する思いを話してくれた。自分の好きな本に対する、子どもの内から出るあふれんばかりの思いを目の当たりにして、この興味・関心を国語の授業にも生かしたいと考えた。そこで本実践に入るにあたり、子どもに一冊ずつ自分の一番好きなお気に入りの本を持ってこさせ、みんなの前で紹介し合うことにした。(資料2)

普段、口数が非常に少なく、気の合った友達ともあまり自分から話すことのないC子が、友達から聞かれたことだけでなく、自分から

C子 「私の好きな本は、『ぐりとぐらのおきやくさま』という本です。サンタクロースのおじさんが、ぐりとぐらのためにケーキを作ってくれたのに、いろいろな動物に分けてあげるお話です。」

D子 「どんなところが好きなんですか。」

C子 「ぐりとぐらがとてもやさしいところです。私は、小さい頃から『ぐりとぐら』を読んでいて、今でもよく読んでいます。ぐりとぐらは、いつもやさしいから、いい話だなと思っています。『ぐりとぐら』はこの本のほかにあるんだけど、どれもおもしろいので、ぜひ読んでみてください。」

●資料2／授業記録

進んで楽しそうに話す様子が印象的であった。

子どもの紹介に続けて、文部大臣賞を受賞した子どもの手作り絵本を紹介し、読み聞かせをした。本はプロの作家が作るものだと思っている子どもたちに、自分たちでも工夫をすれば、作ることができるということに気づかせたかったからである。読み終えると、「ほくも作ってみたい。」「私もやってみたい。」という意見が子どもたちの中から出てきた。こうして子どもたちは、「わたしの物語」作りに思いを馳せ、学習を進めていった。

(2) 空想物語のおもしろさ、よさを見つけた子どもたち

物語の構成を知るために、それぞれが持ち寄ったお気に入りの本と共通教材「あ・し・あ・と」とを比較読みすることにした。

T「みんなが持ってきた本と『あ・し・あ・と』とで似ているところや違っているところはないかな。」

C「私の本はネコが主人公だけど、『あ・し・あ・と』は恐竜と人間が出てくるよ。」

C「私の本は冬のお話だけど、『あ・し・あ・と』は秋の話だよ。」

C「僕の好きな本は動物がしゃべるんだけど、『あ・し・あ・と』も恐竜がしゃべるところが一緒だよ。」

C「でもそれって両方とも想像の話だね。」

C「そういえば、『ハリー・ポッター』とかも想像の話だね。」

T「こういう話を『空想物語』というよ。」

C「『空想物語』だったら、想像の話だから、どんなことが起こってもいいんだよね。それじゃあ、空想物語を作ったらおもしろそうだな。」

C「僕も空想物語を作ってみようかな。」

物語の最後、「もういいかい。」「まあだだよ。」「もういいかい。」「もういいよ。」の後、なぜだいきはフクイリュウに「みつけ。」と言わなかったのだろう。

この疑問をもとに、みんなで話し合った。

C1「『こんなにたくさんの木が生えるまでずっと待っていてくれてありがとう』と心の中で言っているんだと思います。」

C2「長い間待たせてしまったおわりに、今度は自分が待とうと思ったと思う。」

C3「フクイリュウ君は待ちくたびれて疲れてしまったから、そっとしておいてあげたかったんだと思います。」

C4「フクイリュウ君は静かに山になったんだと思う。」

●資料3／授業記録

資料3のように、2つの物語を比べるという方法を取り入れたことで、物語の状況設定や文章構成、会話文、表現などの工夫を子どもが書き手となって探し、互いに発表し合いながら学ぶことができた。また同時に、自分の作る空想物語のイメージを膨らませることができたのだった。

そして、「あ・し・あ・と」の本文を五場面に分け、読み進めていった。自分の好きな場面に対する初発の感想を発表し合い、それぞれの子の思いをそのまま認める場作りをしたことで、子どもたちの読みは多様に広がることができた。

初発の感想では、五の場面を選んだ子が比較的多かったが、その内容は、「だいきとフクイリュウが再会できてよかった。」「フクイリュウはだいきをずっと待っていてえらいなと思った。」など、自分の感じた思いが主であった。しかし、各場面ごとに書き手の立場に立って読み進めていったことで、文章表現を手がかりに登場人物の心情に迫る疑問も子どもたちの中から出てくるようになった。

上記のように、子どもたちは書き手の立場から物語を読みながら、空想物語の中に浸りきり、「ふるさとの山」とフクイリュウの関係についても子どもたちなりに読み深めることができたのだった。

(3)自分の思いを生かした物語作り

「あ・し・あ・と」の学習を終え、いよいよ「わたしの空想物語」作りに取りかかった。始めに立てたプロットから、人間・動物・おもちゃなど、主人公の種類別にグループを作ることにした。製作する中でアドバイスし合ったり、推敲し合ったりしながら、互いに書く力を高め合っていくことができると考えたからである。これまでの読書体験や書き手としての学習を通して、それぞれの物語に対するイメージができていたため、子どもたちは実に様々な空想物語を意欲的に作り始めた。

(a)文章構成に気をつけて作ったD子

物語を作成するのにあたり、子どもたちには4枚の八つ切り画用紙を渡した。画用紙を半分に折って見開きの形にし、それぞれ「起のページ」「承のページ」と一枚ずつ書いていった。D子は次のようなプロットを立ててきた。(資料4)

「先生、『転』は内容ががらっと変わるから、ちょっと悲しい場面にするんだ。でもやっぱり『結』はハッピーエンドがいいよね。」と言ってくるなど、D子は、当初から起承転結の構想が明確で、1ページ一時間の製作時間を設定したのだが、一時間に2ページの勢いでどんどん書き進めていった。

「きれいな花とちょうちょ」

【起】きれいな花とちょうちょが出会う

【承】友達になって楽しく過ごす

【転】しかし、雨がしばらく降らなくなって、花は枯れてしまう。ちょうちょはとても悲しむ

【結】そんなある日、雨が降って、花は元気になり、また仲良く遊ぶことができるようになるのだった

●資料4／D子のプロット



「承」のページ

「起」のページ



「結」のページ

「転」のページ

読んだ子たちから寄せられた感想の中にも物語の構成についてのものが多く見られた。

- ・ D子さんの物語は、文は「転」が一番よかったです。花ががれちゃってかわいそうでした。「結」は、花とちょうちょが再会できてよかったと思います。花がちょうちょにあやまるところが心に残っています。
- ・ 花ががれたことで、二人が別れたところがかわいそうでした。でも最後、また会えてよかったと思います。あと、絵がとっても分かりやすかったです。

●資料5／読んだ子の感想より

資料5のように、物語の構成を工夫したことによって、D子の思いも読者に伝えることができたのだった。

(b)文章表現を工夫したE男

将来博士になることが夢であるというE男は、間違って届けられた博士の発明品からしゃべる雲が生まれて、主人公と楽しく過ごすという物語を作った。雲が歌を歌いながら生まれたり、雲が大好きなたこ焼きを食べて大きくなったりするなど、文中には様々な工夫がなされていた。中でも特に際立っていたのは文章表現であった。

- ・ 「こ、これは・・・」というところとかが楽しくてもう一回読んでみたいと思った。(O男より)
- ・ 「こんなアホなコトがありますかいな。」と言うところがとってもおもしろかった。たぶんE君は本を読んでいるときにみんなに少しでも笑ってほしいから入れたんだと思う。(Y子より)

●資料6／読んだ子の感想より

E男は、方言を取り入れたり、冒頭句の繰り返しを用いたりして、主人公の驚く様子を的確に表現し、読んだ人を楽しませることができた。

物語作りは、最初、難しいかな、と思ったけど、よく考えたら全然困りませんでした。自分が思ったままに作ればいいからです。だれも作らないものを作ろうと思いました。例えば関西弁を使ってやれば、聞いた人が笑ってくれるかもしれないと考えました。みんなの印象に残る本にしたいくて、作りました。

E男は、物語作りを振り返った感想を上のように書いた。これまでの学習を通して、物語を書くという意識が育つとともに、楽しい物語を作りたいというE男の思いが、様々な文章表現の工夫をさせ、書く力を伸ばすことに繋がったのだった。子どもたちが自分の思いをいきいきと表現しようとする中で、物語の構成や文章表現・内容に様々な工夫がなされた。

また、製作する中でグループごとに読み合い、推敲する場を設けた。ただ読み聞かせをし、感想を言い合うだけでなく、アドバイスするという観点を与えたことで、どのグループもより主体的で活発な話し合いがなされた。

話し合いでは、資料7のように、物語の内容や文章表現に関する意見が子どもたちの中から多く出てきた。友達の意見を参考に推敲・校正をしながら、どの子も自分の物語の高まりを実感することができたのである。一人ひとりが作家となって「わたしの空想物語」を作り読み合ったことで、子どもたちは確実に書く力を伸ばすことができたのだった。

(4) 互いが互いを高め合った発表会

(a) グループ発表会

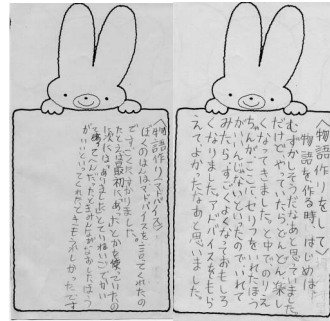
全員の「わたしの空想物語」の完成を待って、読み聞かせ会を行った。5～6人のグループ内での発表だったためか、どの子も安心して意欲的に読み聞かせをすることができた。中でも、人前で話をするのが極度に苦手だったG子が、グループ発表では、すらすらとはっきりとした口調で読み聞かせをしている姿が印象的だった。G子は本の最後のページに「著者のことば」として次のように書いている。

自分の本を読んでよかったところは、自分で作ったところですよ。本を作るとちょっとおもしろいなあと思いました。(中略) かんたんだったけど、かなりむずかしかったです。でも自分で作れて良かったです。自分で作れるんだってすごいなと思いました。

G子は、この本を作ることで自分に自信を持つことができた。そして、グループ発表の場は、そんなG子にとって、いい自己表現の場となったのだった。

(b) 全体発表会

グループ発表で特に人気のあった物語を全体場で発表することにした。H男が発表を始めると、どの子も友達がどんな物語を作ったのかという期待で目をきらきらと輝かせな



●資料7／物語作り・推敲の感想



●写真1／物語作り・推敲の感想

がら空想物語に聞き入っていた。「おしまい。」の言葉と同時に大きな拍手が教室に響き、感想を交流し合った。「言葉が工夫してあっておもしろかった。」「話し方に気持ちが入っていてよかったと思います。」など、話し方や文章表現に関するものの他に、「H君の終わりの方が私の終わり方よりよかった。私のは最後死んでしまうけど、H君のは、いたという証拠が残っていたからです。」と自分の物語と比べた意見まで出てきた。ただ自分の感じた思いをそのまま発表したお気に入りの絵本紹介の授業が思い出され、子どもたちの物語を見る目の高まりを強く感じずにはいられなかった。

次に発表したI子の物語には、資料8のような感想が出された。

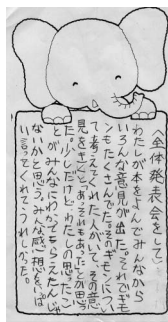
それぞれが意見を言いながら他の意見を聞き合い、話し合いを深めていくことができた。またそればかりでなく、登場人物の心情変化にまで疑問という形で目が向けられ、それを

- C 1 「最後は女の子は、ボンと仲良く遊んでいた
いなと思いました。」
- C 2 「疑問なんだけど、最初けい子はボンをいやだ
と言ったのに、どうして一緒に遊んだのかなと
思いました。」
- C 3 「ボンはぬいぐるみなのに動いたりしゃべった
りするから楽しかったんじゃないかなと思
う。」
- C 4 「ボンがけい子の名前を知っていて、友だちだ
から遊んだと思います。」
- C 5 「S男君につけたしで、「あ・し・あ・と」で
もフクイリュウ君が『ともだち』と言ったから
友達になった。それと似ていると思います。」

●資料8／授業記録

子どもたちなりに考え解決しようとするこ
うのでした。

授業感想にI子は資料9のように書いている。



●資料9／I子の感想

自分の物語に込めた思
いと、読んだ人の感じた
思いとは異なることに気
づき始めているI子がう
かがえる。このような意
見交流の場を通して子ど
もたちは新たな気づきを
し、互いに読みを深め合
うことができたのだった。

4 考察

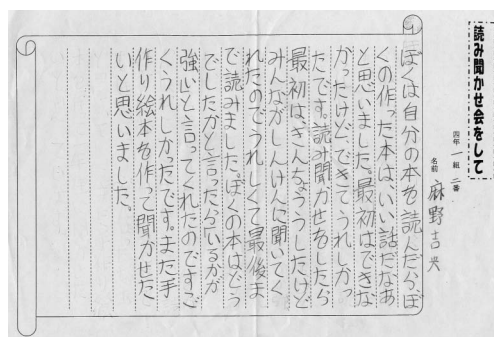
以上の研究実践を振り返り、仮説を実証す
るための具体的方策が有効であったかどうか
吟味していきたい。

「わたしの空想物語を作ろう」の活動では、
物語の作成や読み聞かせをする子どもたちの
いきいきとした姿を多く見ることができた。
どうして子どもたちは、最後まで意欲的に取
り組むことができたのであろうか。

これまでの活動を振り返った感想に、J子
が、「自分だけの本が作れるのでドキドキし

ました。他の子どもも真剣にやっていたので、私
も張り切ってやることができました。」と書
いたように、世界に一つしかない、自分だけ
の物語を作ることができたことが大きいであ
ろう。制約にとらわれることなく、自由な発
想で作れたことで、子どもたちは意欲的に書
くことができた。そして、それぞれの空想物
語を本という形に作り上げたことが、子ども
一人ひとりの自信に繋がり、いきいきと発表
することができたのだった。

また、「わたしの空想物語」作りを通して、
どの子どももその子らしい表現をしながら、それ
ぞれの言語能力を伸ばすことができた。中で
も印象的だったのはK男である。K男は場面
緘黙の傾向にあり、お気に入りの絵本を紹介
した授業でも、みんなの前へ出て絵本を見せ
るだけで、とうとう自分で書いた紹介文を発
表することができなかった。しかし物語の構
成やおもしろさを知ると、自分を主人公にし
て「いるかとぼく」という物語を作った。本
が完成すると、K男に少しずつ変化が見られ
るようになった。これまで1分間スピーチは
もちろん、本読みもするのが難しかったK男
が、グループ発表では、自分の作った物語を
しっかりと声に出して読むことができたので
ある。K男の相互評価カードにも、自分の欄
には「聞く人を見ながら話すことができた
・・・A」「はっきりと分かりやすく話した
・・・A」の文字が並び、いかに自信を持っ
て話すことができたかが分かる。そしてK男



●資料10／K男の感想文

の授業感想には資料10のように書かれていた。

グループに分かれての物語作成や、読み聞かせなど、それぞれの活動に友達とかかわりあう場を設けたことで、子どもたちの意欲を持续させ、一人ひとりの「話す力・聞く力」「書く力」「読む力」を高め合うことができた。そして、推敲（アドバイス）や発表会を通して、自分の思いを伝え、共有し合い、お互いがお互いのよさを認め合うことができるようになったといえるであろう。

5 研究の成果

子どもたちが作った物語は、どの作品もその子らしい思いがたくさんつまったものになった。完成の後、保護者の方に読んでいただいた感想にも、次のように書かれていた。

「部屋を片付けなさい」は、いつもお母さんがM子に言う言葉ですね。だから魔法があったらいいなと思う気持ちから、この本ができたんですね。すごくおもしろく読めました。魔法使いと主人公の友情がとてもよかったと思います。お姉ちゃんもおもしろかったと言っていました。（母・姉より）

父母に認めてもらえたことがうれしかったのか、祖父母や親戚の人にも読んで聞かせたいからと、週末の度に家に自分の作った物語を持ち帰る子どもも多くみられた。「わたしの空想物語」を通して、子どもたちは表現すること、伝えることの楽しさをいろいろな場面で見出すことができたのだった。

そして全体発表会の後、子どもたちはもっといろいろな人に物語を読んで聞かせたいと言い出した。そこで1年生を対象に読み聞かせ会を行った。初めはどちらも緊張した面持ちだったのだが、読み聞かせが始まると、1年生の子たちは物語に引き込まれ、笑い声や拍手があちこちで聞かれた。読み聞かせをする本学級の子の表情は真剣そのもので、1時間はあっという間に過ぎた。読み聞かせの後、感想を交流し合い、クラスで話し合った。

- C 1 「1年生の子に『その本ちょうだい』って言われたよ。」
- C 2 「『なかよしぶんこ』に置いてあげようかな。」
- C 3 「でも、ぼくたちが作った本は漢字とかいっぱい使ってるから1年生の子には読めないよ。」
- C 4 「それじゃあ、ふりがなを付けるか平仮名の本をもう一冊作ったらいいんじゃないかな。」
- C 5 「あと、私たちにはいいけど、1年生の子たちには内容とか言葉とか難しいところがあるよね。それも直さないと。」
- C 6 「1年生や他の子たちのために、もう一冊物語を作りたいな。」

●資料11／授業記録

発表を通して子どもたちは、自分の思いを一方的に伝えるだけでなく、相手への伝わり方も考えて、伝え方を工夫することの大切さに自ら気づくことができたのだった。

6 おわりに

今、子どもたちはそれぞれのペースで自主的に2作目の物語を作成している。1年生の子が読みやすいように平仮名で書かれた物語を作る子、幼稚園のいとこにプレゼントしようとその子が主人公の物語を作る子など様々である。そんな中で、L子は「戦争ってこわい」という本の下書きを冬休みに作って持ってきた。よく見ると作者の欄には、L子とL子の祖母の二人の名前が書かれていた。聞いてみたところ、「おばあちゃんから戦争の話聞いて、大切なところを書いておかなきゃと思って作ったから。」という答えが返ってきた。自分の思いを楽しみながら表現した空想物語だけでなく、読み手を意識して、事実や記録などを伝える手だてとしても、本作りを教材として活用することができるのではないだろうか。相手を意識し、相手に応じて適切に伝える力こそ、「伝え合う力」の根幹をなすと考ええる。「わたしの空想物語」の作成を通して子どもたちが身に付けた「話す力・聞く力」「書く力」「読む力」を生かして、今後は相手を意識して、適切に伝え合う手だてとその支援のあり方について探っていきたい。